

付子か谷尾瀬

2007.08 vol.2
(財)尾瀬保護財団



尾瀬国立公園の 誕生にあたって

財団法人尾瀬保護財団
副理事長 佐藤 雄平



尾瀬の自然保護に携わる人々の長年の願いでありました「尾瀬国立公園」の誕生が、いよいよこの夏にも実現しようとしています。私自身も、これまで尾瀬地域の単独国立公園化に取り組んできたところですが、この度地元の方々をはじめとする関係者の努力が実を結ぶこととなり、改めて敬意を表する次第です。

尾瀬は、多くの貴重な動植物が生息する日本有数の高層湿原であり、学術的価値が極めて高いものです。また、電源開発や観光道路の建設計画など、数々の開発の波にさらされながらも、先人達の懸命な努力によって守られてきた歴史や、ごみ持ち帰り運動発祥の地であることなどから、尾瀬は日本の「自然保護運動の原点」と言われており、数ある国立公園の中でも独自の地位を獲得しております。

既存の国立公園から独立し、単独の国立公園となるのは、尾瀬が日本で初めての事例であります。今回、日光国立公園から独立して、新たに福島県の会津駒ヶ岳及び田代山・帝釈山を編入しての単独国立公園化は、我が国が世界に誇る尾瀬を、改めて国内外に発信する絶好の機会ととらえております。

このため、21世紀にふさわしい保護と利用が調和した国立公園として

いくことが重要であり、先人たちの自然保護への熱意を継承していくとともに、新たな国立公園としてのあり方をみんなで考えていかなければなりません。

昨年取りまとめた「尾瀬ビジョン」においては、「みんなの尾瀬を みんなで守り みんなで楽しむ」を基本理念とし、今後の尾瀬のあり方が提言されています。

平成7年度に福島県、群馬県、新潟県の3県、檜枝岐村、片品村、湯之谷村(当時)の3村、東京電力等により設立された尾瀬保護財団は、まさに「みんなを守る」の基本理念を先取りした枠組みとなっており、行政機関はもとより、土地所有者である東京電力、自然保護団体、各山小屋、ボランティアなど尾瀬に関わる人々が、尾瀬の保護と適正な利用について、共通のテーブルで話し合う場としての当財団の役割は極めて大きなものがあり、その責任の重さを痛感しております。

そして、単独国立公園化により、名実ともに「国民の宝」なる尾瀬は、地元の人々が守り、ともに生きてきた「地域の宝」であり、この尾瀬を訪れ、この美しい自然に心躍らせ、この自然を守りたいと願う皆さん一人一人の「みんなの宝」でもあります。皆さんのそれぞれの思いを、この尾瀬の保護のために、ひいては、この尾瀬から新たな自然保護のモデルとして発信できるような、当財団では、今後、環境教育やエコ・ツーリズムの推進、尾瀬に対するあらゆる人々からのサポートを受ける仕組みづくりなど、様々な事業を進めてまいります。

創刊2号となるこの機関誌「はるかな尾瀬」を御覧の皆さん、尾瀬を愛するすべての方々におかれましては、今後とも、当財団への御理解をいただくとともに、より一層の御支援を賜りますようお願い申し上げます。

目次

- 03 副理事長あいさつ
尾瀬国立公園の誕生にあたって
- 04 リレーエッセイ
中田代の池塘の小さな生き物
- 06 トピックス
第25回理事会・評議員会他
- 07 エッセイ 尾瀬好日
尾瀬へきらっしやい
尾瀬に想いを
- 09 現地情報
原をわたる風だより
おこじよだより
- 11 連載コラム
「魚沼から行く尾瀬～昔と今、これから～」
「登山口の山小屋が知る苦労と経験」
- 13 尾瀬ボランティア情報
- 14 「友の会」コーナー
- 15 イベント情報

「今月の表紙」



尾瀬ボランティアによる至仏山植生保護柵設置
後方 燧ヶ岳、左 会津駒ヶ岳

リレーエッセイ

中田代の池塘の小さな生き物

岩熊 敏夫

尾瀬ヶ原には180を超える数の池塘が存在している。中田代には、中央部の最高地点近くに水深3メートルを超える最も深い池塘があり、その周りに多くの浅い池塘が分布している。水面の標高が違ってそれぞれの池塘の水位は安定していることから、池塘の底の透水性は非常に低いと考えられる。湿原斜面に沿って地下水位を連続観測した結果、中田代中央部の周りは、降水により地下水表面が約15〜30センチメートルの深さで変化するものの、比較的安定していることが分かった。ミズゴケ層から泥炭表層にかけては水はけがよく、その下は透水性が低く水分を保持している。このため雪解け時にも一面が水浸しになることもない。

池塘の底に棲む底生動物を加藤秀男さんと調べてみた。0.3ミリメートルメッシュのたも網で採集してみると、昆虫類が個体数の90パーセントを占め、他は貧毛類、そして等脚類のミズムシな

どであった。ユスリカ類の幼虫が個体総数の約70パーセントを占め、そしてトンボ類、イトトンボ類の幼虫も多かった。ユスリカ類は、体長が数ミリメートルで、肉食性のものも含まれていたが、大半が藻類や堆積有機物を食べていた。そしてトンボ類の消化管は約70パーセントがユスリカ幼虫で占められていた。小さなユスリカがトンボの幼虫時代を支え、尾瀬をトンボ類の宝庫しているのだろう。ちなみにイトトンボ類の幼虫は水中のミジンコ類を主食にしていた。

昆虫類が多ければ、彼らは池塘の間を自由に飛び交うことができるので、池塘間の底生動物相は似通ってくるのではないだろうか。そこで底生動物相の比較をしてみたが、池塘間の距離に関係なく類似性は低かった。これと同じ現象は福島県の宮床湿原の調査でも確認されている。以上の底生動物相の比較ではユスリカ幼虫を細かく分類していないが、上野隆平さんは宮床湿原底質のユスリカを飼育して羽化させ、成虫の分類を行った。ユスリカの種類で水域間を比較すると、さらに類似度は低くなる。第3次の尾瀬学術調査では、宮床湿原よりも遙かに多くの種類のユスリカ成虫が記録されている。小さな池

塘ユニットの集合が生物の多様性を高める役割を果たしていることは確からしいが、生物相に少しずつ違いをもたらしている機構は、まだ解明されていない。

30数年前、観光客でにぎわう尾瀬を訪れた婦りに、沼山峠付近で宿泊した。そこで知り合った老夫婦が、見たこともないような湿原があるから私たちを案内してあげよう、と誘ってくれた。翌朝訪れたその湿原は、確かに車道から僅かに離れただけなのに、吸い込まれるような神秘的な静けさを漂わせていた。この帯には、このような素晴らしい湿原が無数にあるのだと言われてさらに驚いた。

思えば、生物とは全く関係のない仕事をしてきた私の興味が、少しずつ変わっていくきっかけであった。その後湖の生態調査に携わり、さらに様々な湿原の生態系の仕組みを調べることになった。つい先日、中央環境審議会自然環境部会が、尾瀬地域を日光国立公園から独立させ、会津駒ヶ岳地域と田代山・帝釈山地域を含めて尾瀬国立公園とするべきである、との答申を出した。あの神秘的な湿原もきっと喜んでいることだろう。

筆者紹介

岩熊 敏夫(いわくま としお)

北海道大学大学院地球環境科学研究院長

専門は陸水生態学

著書に「湖を読む」(岩波書店)、「ユスリカの世界」

(共編著)(倍風館)など



▲尾瀬の池塘

【ミニ解説】

ユスリカとは？

ユスリカ(揺蚊)はハエ目糸角亜目ユスリカ科に属する昆虫の総称。

「カ」に良く似た大きさや姿をしているが、刺すことはない。またカのような鱗粉も持たないため、カと見誤って叩いても、黒っぽい粉のようなものが肌が付くことはない。大部分の種は幼虫が水生で、川、池などほとんどあらゆる水域に棲んでいる。他には海の潮間帯に棲むものや陸生のもの、水辺の朽木の中や土壌中などに棲む半水生的なものなども少数ある。中には水生昆虫や貝類に寄生する特殊なものも知られている。

釣り餌に使われるアカムシはオオユスリカやアカムシユスリカなどの幼虫である。成虫はしばしば川や池の近くで蚊柱をつくる。名前は幼虫が体を揺るように動かすことに由来すると言われる。水田で稲を揺するからとの説もあるが、実際に揺するとは考えられない。

非常に種類が多く、世界から約1万種、日本からは約1000種ほどが記載されているが、実際にはこれらの数字よりもずっと多くの種が存在することは疑いない。

出典：フリー百科辞典『ウィキペディア』

財団法人尾瀬保護財団 第25回理事会・評議員会

尾瀬保護財団理事会・評議員会が本年6月29日に都道府県会館(東京都)において開催され、平成18年度事業報告、平成18年度決算などが原案とあり決定されました。また、理事の辞任に伴う後任理事の選任、評議員の改選、尾瀬賞運営委員会委員の改選が行われました。その他、就業規程の改正が原案とあり決定されました。

さらに、報告事項としてこの夏にも尾瀬国立公園が誕生することを記念して、尾瀬サミット2007を「尾瀬国立公園記念サミット」として開催することなどが報告されました。

第10回尾瀬賞授賞式および記念講演会

6月29日と同じく都道府県会館において、第10回尾瀬賞授賞式及び記念講演会が、多くの来賓や関係者を迎えて行われました。

受賞者は、赤木 右(あかぎ たすく)氏で、賞状と賞金百万円の目録が授与されました。授賞式に引き続き、赤木氏より記念講演が行われ、一般の方にもわかりやすく、赤木氏の研究成果が説明されました。

受賞者

赤木 右(九州大学大学院理学研究院 教授)

授賞研究

「湿原の化学的特徴を用いた地球環境指標の開発と応用」

※尾瀬賞とは?

尾瀬をはじめとした湿原は、多くの生物にとって貴重な自然ですが、人為的な影響により年々減少しています。

当財団では、尾瀬をはじめとする湿原を保護するためには、基礎的研究に基づいた議論の展開が必要であると考え、湿原を対象とした学術的・学際的研究を奨励するため顕彰事業として「尾瀬賞」の授与を平成9年から実施しております。

第11回尾瀬賞の募集

現在、第11回尾瀬賞の応募を受け付けています(本年10月31日まで)。研究対象は、「主として泥炭を有する湿原及びそこを生活の場とする生物」ですが、対象は尾瀬だけとは限りません。応募者の年齢は50歳未満としますが、詳しいお問合せは、当財団事務局までご連絡ください。

至仏山保全緊急対策会議

至仏山の保護と適正な利用を検討するため、「至仏山保全緊急対策会議」が本年7月11日に群馬県庁で開かれ、7月1日の登山道閉鎖解除後の問題点や、保全のために更に検討しなければならない事項について、活発な議論が行われました。

なお、東面登山道の「上り」利用をさらに進めるため、関係者が協力して入山者に周知していくこととしました。



▲第10回尾瀬賞を受賞した赤木石氏

エッセイ 尾瀬好一日

尾瀬山小屋組合長

白石 光孝

『尾瀬へきらっしやい』

尾瀬山小屋組合ってなーに？…とおっしゃる方もいると思います。関西に誘客PRに行った時のこと、「尾瀬の名は？知ってます。山小屋組合？知りません。尾瀬の位置？東北の方で福島の方かな…」こんな会話が返ってきました。

尾瀬の多くの小屋主は、2〜4代目となっています。先代は、尾瀬を生活の場として小屋を建て住んでいたのです。尾瀬への入山者、宿泊者増にあわせて、山小屋の数も増えていきましたが、これをまとめていく仕組みがありませんでした。尾瀬の山小屋は今、宿泊所が22軒・休憩所が6軒あります。小屋主は福島県と群馬県に居住しており、春から秋までは尾瀬に入り、冬は地元に戻ります。このように尾瀬の小屋主たちが、一緒になって話し合い、尾瀬での調和のとれた施設運営等をはかるため、今から29年前に尾瀬山小屋組合は出来ました。

組合設立の3年後に始めた「尾瀬山開き」は今年で27回となり(下記写真)、5月24日、檜枝岐村御池登山口で大晴天の下、盛大に行われました。毎年、群馬・福島で交互に行っていますが、来年は、単独の尾瀬国立公園の話題もあり、記念すべき山開き

として多くの人が集まり実施できればよいと思っています。

自然の尾瀬に、人小屋等が入ったことにより湿原、植物に影響を与えていることから、小屋の雑排水、汚水の合併処理浄化槽を設置することとしました。各小屋は大変な出費をしながら、尾瀬の自然との共生を心がけ、尾瀬の番人のひとりとしてがんばり、平成6年には全ての山小屋の浄化槽工事を完了しました。

荒れた湿原回復のための取組も行っていきます。緑を戻すためミタケスゲの種を組合員が毎年採取し提供してきましたが、最近では、湿原も大分回復してきましたので、昨年から帰化植物除去を行うこととしました。尾瀬の中の帰化植物は、現在20種類有ると言われています。小屋周辺の状況を見ながら根気よく続けて行きたいと思っています。

尾瀬は天候が変わりやすい所です。「弁当を忘れても傘忘れるな」の言葉もあります。豪雨になるとたちまち湿原は大河となり、木道は流れ、歩けません。早速、関係者で誘導を行い、ケガ、急病人等を救助するなど、多くの人が尾瀬で楽しめるようお手伝いをしています。

尾瀬の入山者は、10年前の約半分になっています。尾瀬のすばらしさは宿泊して体験するのが一番です。植物の息吹、鳥のさえずり、夕焼け、朝焼け、

星空の輝き、朝もやの景色など…。どれをとっても癒されます。ぜひ、時間をかけてゆっくりと尾瀬を堪能していただくとともに、エコツーリズムが注目されている今日、地元温泉を訪れるなど周辺地域も大いに楽しんでいただければと思います。お待ちしております。



▲第27回尾瀬山開き(檜枝岐村御池登山口)

『尾瀬に想いを』

尾瀬ボランティアは、尾瀬が大好きな人達ばかりの集まりの様に思います。つまり尾瀬病とでも言うのでしょうか。「尾瀬」という言葉を聞いただけで体がゾクゾクとして、それについて知りたい、聞きたいと思いつけ、ボランティアを始めて今年で既に12年目になりました。始めた頃に比べて体力は落ちましたが、気力だけはまだまだと思っています。

最初の頃のボランティアの活動は「ゴミ拾い・入山口指導が主で、タバコの吸殻・アキ缶・紙くすなど多くありましたが、最近はどうしても少なくなりました。」「ゴミ持ち帰り運動や、尾瀬の自然を大切にという気持ちが浸透してきたのでしょうか。大変喜ばしい事だと思えます。

数年前の初夏の頃、「ゴミを探しながら大江湿原を歩いている時、木道と木道の間に、目立たない色をしたザゼンソウに似ている花を見つけました。これは何だろうと思いつ、早速尾瀬沼ビジターセンターにお聞きしたところヒメザゼンソウだと解り、まるで宝物でも見つけたような気持ちになりました。これも「ゴミ拾いをしていたからわかったこと、良かったと思えました。ちなみに水芭蕉の頃のヒメザゼンソウは、緑色の大きな葉がすっかりその存在を主張し

ています。

平成16年6月14日早朝、強い霜が降りて真っ白になった大江湿原の風景には本当に驚きました。「コバイケイソウや水芭蕉の大きな葉の首をうなだれた姿が今でも印象に残っています。その年のニッコウキスゲは花数が大変少なく、いつもは一面黄色になる筈のあの花達はどこへ行ったの、と皆で話しておりました。「この霜が原因よ」と私は写真を見てもらい、お話ボランティアへ私はおしゃべりボランティアだと思っています」と後で話した事を思い出します。

尾瀬沼畔の第二テラスでお話ボランティアをする事が多いのですが、北は北海道から南は九州からお見えになり、「来て良かった」「やっと念願がなつて来れたのよ」「涙が出るほど感動した」「尾瀬に来たいから病氣と闘つ……、素晴らしい」と、いろいろな事を話して下さいます。感動を自分の胸にしまっておけない、言葉で表したい、そんな気持ちが表われた、皆さん良い笑顔です。いつ行っても、尾瀬の風景・花・風は、私たちを温かい穏やかな気持ちにさせてくれます。別世界に来ているようにも思わせてくれます。

「小学生の孫の教科書に尾瀬ボランティアの事が出てるようですが、こういう事しているの」と友達に聞かれ、誇らしくもあり、しっかり責任を持ってやらなくてはと思いました。

また、忙しい日程で尾瀬に来る学校を見かけますが、もつと時間をかけ、ゆっくりと尾瀬の良さを味わって欲しいと思うとともに、「そしてこんな素晴らしい尾瀬をいつまでも守り続けてもらいたい」と願って、子供達を見たいです。

12年間のボランティア活動のなかで尾瀬を愛する多くのボランティア仲間とお会いできたのも大きな宝です。今年の尾瀬は例年より雪が少なかつたようですが、5月末の水芭蕉の時期から半年の間、どんな花と出会いどんな人達とお会いできるのか考えると、心が躍り待速く思っています。



▲ゴミ拾いボランティア中(大江湿原)

原をわたる風だより

初めての尾瀬

あつらいの間に夏が来た

ビジターセンターでの勤務がはじまり3ヶ月が過ぎました。5月の入山当時使っていた厚いフトンも、今は部屋の片隅に置かれたままになっています。

ビジターセンターの仕事は、自然情報の提供や研究見本園での観察会、公衆トイレの清掃など様々です。さらに、今年初めて尾瀬に来た者は、花の名前も覚えなくてはなりません。

ミスバショウと同じ頃にひっそりと咲くワタスゲ、ヤチヤナギや黄色が鮮やかなリユウキンカ……。花が咲くのは湿原だけではありません。林内では、タムシバやオオカメノキ、エンレイソウやオオバキスミレ等が咲き始めます。

花の開花とともに、尾瀬を訪れる人の数も増えてきます。「ミスバショウが一番きれいなところは、」ここまで来る間に咲いていた黄色いお花は何かしら？」などと、尋ねられる内容も様々です。分からないことを聞かれることも多くあり、そんな時は先輩スタッフにバトンタッチ！

研究見本園での観察会も始まりました。40分程度の時間ですが、話を続けるのはなかなか大変です。緊張して花の名前が出てこなかったり、花の咲いている場所を歩き過ぎてしまったりすることもありました。終わった後に、「楽しかった」「参加して良かった」と言ってもらえると、ほっとするとともに嬉しい気持ちになります。

ろく、尾瀬ヶ原では散ってしまったチングルマが、至仏山ではホソバナウスユキソウと一緒に満開のお花畑になっていたりします。

7月に入ると、ニッコウキスゲも咲き始め、満開になる頃は、もう夏休みです。また、8月にはミスギク、オゼヌマアザミ、ミヤマアキノキリンソウなど花の種類も増え、「原」はまだまだ賑わいます。

尾瀬は本当に花の多い所です。お越しの際はぜひビジターセンターにお立ち寄りください。見頃のお花やビューポイントを、ご案内いたします。

尾瀬山の鼻ビジターセンター



▲夏の自然観察会



▲ニッコウキスゲが揺れる尾瀬ヶ原

おじぎょだより

2007年

尾瀬沼で夏が訪れました

5月1日に開館して以来3ヶ月の月日が経ちました。この間の尾瀬沼ビジターセンターの出来事を振り返り、一言で表すと『リニューアル』という言葉がピッタリではないでしょうか。と言っても、施設が新しくなったわけはありません。既設の展示に加え、職員みんなでアイデアを出し合い、手作りで新しい企画を始めたのです。

一つは、小規模ではありますが、顕微鏡を使って蝶の羽の「美しさ」を見てもらう企画です。蝶の羽の模様を作り出している、宝石をちりばめたような「鱗粉」の美しさ、細かさに、万華鏡のような世界が広がります。親子連れ、特に男の子が熱心に顕微鏡をのぞいている姿をたびたび見かけます。

二つ目は、二ホンジカの頭骨標本や

尾瀬に生息する野生動物の足跡石ころを展示しました。オス鹿の角を実際に見て、触ることで野生動物を身近に感じ、自分たち人間と同じ時間を生きる存在であることを理解するきっかけとなってくればと思います。

三つ目は、今までビジターセンターや山小屋等で掲示したり、財団のホームページで掲載していた自然情報やビジターセンターで行っている自然観察会の案内などを、展示室に設置したパソコンの動画で繰り返し放映するようにしました。

四つ目は、8月中旬に誕生する「尾瀬国立公園」に新たに加わる会津駒ヶ岳、田代山、帝釈山等会津の個性的で魅力的な山々の展示コーナーを設けたことです。美しい写真やレポート、資料によって楽しんでいただけるかと思っております。

また、8月には、企画展「木道」を開催します。現物の木道を展示することにも、「木道の歴史」、「木道の種類」、「木道を守る人々」、「木道のある風景」

の四つのテーマでパネルを作成しました。準備に当たって、木道工事に従事している人からお話を聞き、今まで知らなかった歴史や維持管理の難しさを知りました。ここで得た知識を自然観察会やスライドショーに活かして行きたいと思えます。

「前とかなり展示が変わりましたね。」という入館者の言葉に励まされ、これからも、お客様により楽しく、より深く尾瀬を知ってもらうために、職員みんなで手づくりのリニューアルをしていきたいと思います。ぜひ、少し新しくなった尾瀬沼ビジターセンターにいらしてください。

尾瀬沼ビジターセンター



▲森にひそむ気配



▲のそいてみよう小さな世界

「存じですか？魚沼市から尾瀬へ行く道のりを…。国道352号線を走り、長いトンネルを通り、雄大な奥只見湖を船で渡り、豊かな森を抜ける道は、尾瀬に到着するまでに、様々な自然の景色を堪能できます。

そんな魚沼から行く尾瀬を、奥只見湖ができる前から見続けてきた桜井昭吉さんにお話を伺いました。

燧

ク岳の雄姿に魅せられて「私は昭和9年に小出町に生まれ、育ちました。学生の頃から登山好きで、越後の山々を歩いていました。越後の山は雪くて、ヤブの濃い夏山よりも、残雪があり涼しく新緑がきれいな春山が好きです」と優しい笑顔で話す桜井さん。

カバンから1枚の写真を取り出して、「高校生で越後駒ヶ岳に登ったのですが、その時に見た燧ヶ岳の雄姿に登山欲をかき立てられました。当時の尾瀬山行には4、5泊も必要で、お米やお金も必要でしたから容易には近付けませんでした」そんな桜井さんが尾瀬に初入山したのは昭和32年だったそうです。

「植物好きな先輩がいて、尾瀬に行くついでに誘ってくれました。ダムがで

きる前でしたから、現在の湖底にあたる平坦な道を温泉宿に2泊して入山しました」と桜井さん。尾瀬の最初の印象を伺うと「登山目的で入山した私でさえも、植物の多さ、きれいさに圧倒された」と、当時の驚きを話してくれました。



▲桜井さんが撮られた尾瀬の山々(昭和30年代)

著

「魚沼から尾瀬への道のりは、著名な登山家も惹き付けられた場所だったようです。昭和30年代は日本のアルピニズムが落ち着き、登山ブームと呼ばれる大衆登山の時代でしたから、著名な登山家たちは騒がしくなってきた「高さと困難性」の山から、「静けさと奥深さ」の山々に避(ひ)衆登山と呼び、好んで行っていたようです。



▲ダム建設直後に船で平ヶ岳へ向かう深田氏(右)

日本百名山の著書で知られる深田久弥氏もその一人で、昭和37年の奥只見湖ができ翌年に平ヶ岳登山を行い、私も現地案内のために同行しました。

当時は登山ルートがなく、中ノ岐沢を避行したのですが、頂上近くにあった池ノ岳の湿原の美しさに深田さんが驚いていたのを覚えています。無事に登頂したのですが、下山ルートに選んだ水長沢は、矢木沢ダム建設によって伐採された倒木が無数に倒れており難儀しました」と、つい先日このことのように、桜井さんは当時の様子を教えてくださいました。

魚

沼から行く尾瀬の魅力
現在もガイドとして活躍する桜井さんに、魚沼から行く尾瀬の魅力



▲現在もガイドとして活躍する桜井さん

力とこれからのを伺うと、「実際に魚沼から尾瀬へとたどっていたら、森の豊かさに驚かれると思います。特に小沢平から沢沢温泉小屋への登山道は比較的なだらかで、ブナやトチノキの巨木があり、当時の姿のままだと思います。

また5月連休後に運行される奥只見湖遊覧船や、丸山スキー場のリフトを使った新緑のスノーシューハイクは、1年のうちで最も美しい姿を見ることができると好きだからこそ、自信を持って話してくれました。

奥只見郷ネイチャーガイド

(新潟県魚沼市吉田1144)

■問合せ先

027-792-7300

(魚沼市観光協会内)

■ガイドについて

要予約・有料

※予約は実施5日前まで

■URL

http://www.city.uonuma-niigata.jp/kankou/nature/nature_guide/

尾瀬沿の群馬県側登山口である大清水は、尾瀬で最も古くから利用されてきたところで、その歴史は1600年の関ヶ原の戦いまで遡ることができます。

そんな尾瀬の要衝とも言える大清水で、古くから物見小屋を営む萩原清さんにお話を伺いました。

林

業、鉱業の中継地として

「この小屋が他の尾瀬の山小屋と異なるのは、建設のきっかけだと思います。私の祖父・友吉は大清水から東へ約2kmほど離れた根羽沢鉱山(昭和18年に閉山)で旅館をやっていたのですが、昭和20年代には周辺の山から木材の切り出しが盛んに行われ、大清水が中継・待合場所として賑わうようになり、祖父もこちらに小屋を移転したのです。その頃の小屋は「大清水待合所」という休憩所兼売店でしたが、父が小屋を継いだ際に宿泊業も始め、「物見小屋」と改名したので、萩原さんは記憶をたどりながら話をはじめてくれました。

「私が物見小屋を継いだのは昭和47年です。それまでは、山から切り出したブナを沼田へ運ぶトラックの運転手をしていました。当時のブナはフローリング材や合板として重宝されましたので、尾瀬周辺では林業が



▲登山基地としてにぎわう大清水(昭和40年代)

非常に盛んでした。「尾瀬周辺の山々で、様々な仕事をされてきた萩原さん。当時の大清水登山口の様子を伺うと、昭和30年代は登山ブームと、ダム開発のために尾瀬がなくなるという噂が相まって、本当に大勢の登山者でごった返していました。鳩待峠への車道が開通した昭和38年までは、大清水が主要な登山口でしたし、当時のバスは小型でしたから朝早くから何十台も停まっていた」と萩原さん。

登

山墓地としての役割

登山者で賑わった頃の物見小屋はどんな様子だったのでしょうか。「どちらかと言えば尾瀬から下山した方が宿泊していました。交通の便が多ほど良くありませんでしたから、田舎で尾瀬に行くことはでき

ませんでした。ミスバシヨウ時期の週末には寝る場所も無かった程です。売店も営んでいましたので、深夜に到着するバス、夕方に到着する宿泊客、翌日の仕込みなど、1日の休憩時間は2〜3時間でした」と忙殺されていた当時を話す萩原さん。

「大清水は登山口であり、下山口でもありません。とても尾瀬に行くとは思えないような軽装の方が小屋前を通りかかっても、無理に止めることもできないし、案の定、下山時にケガをして途中まで迎えに行くことが幾度もありました。当時はマナーも悪く、下山客があちこちで宴会をして遅くまで騒いだり、山行で出たゴミを小屋前に捨てたり、登山者のトラブルが多かったです」と登山墓地である大清水ならではの苦勞がにじみ出ていました。



▲売店には戸倉で採れた山菜が並ぶ



▲物見小屋前に立つ萩原さん

大

清水という場所

「最近では登山者のマナーが良くなっただけでなく、時間を使ってゆっくりと尾瀬を楽しむ方が多くなったと思います。大型連休中の大清水温泉では、ミスバシヨウのお花畑が見られますし、紅葉時期には尾瀬よりも鮮やかな彩りを見させてくれます。

一ノ瀬までの道を尾瀬へのアプローチとしてではなく、紅葉時の遊歩道として歩いていただくと良いと思います」と、大清水ならではの過ごし方を教えてくれた萩原さんでした。

物見小屋

(片品村戸倉596)

- 問合せ先
0278-58-7026
- 宿泊料金
1泊2食6,500円
- 営業期間(平成19年)
4月21日～11月上旬

尾瀬ボランティア情報

このコーナーは尾瀬ボランティアに登録されている方のためのページです。活動に参加を御希望の方は、電話またはメールで、財団事務局まで御連絡ください。

○巡回清掃

入山者に「ごみ持ち帰り」を呼びかけることもにゴミ拾いを行なう。

至仏山

- ・日時／平成19年8月26日(日)9時～15時
- ・集合／尾瀬山の鼻ビジターセンター前

○ありがとう尾瀬清掃

私たちを楽しませてくれた尾瀬に感謝の気持ちを込め、シーズンの最後にみんなで清掃活動を行います。

至仏山

- ・日時／平成19年9月17日(月)祝9時～15時
- ・集合／尾瀬山の鼻ビジターセンター前

アヤマ平

- ・日時／平成19年9月17日(月)祝9時～12時
- ・集合／鳩待山荘前

尾瀬ヶ原

- ・日時／平成19年10月8日(月)祝9時～14時
- ・集合／尾瀬山の鼻ビジターセンター前

尾瀬沼

- ・日時／平成19年10月8日(月)祝9時～13時
- ・集合／尾瀬沼ビジターセンター前

○燧ヶ岳熊沢田代植生復元作業

かつての登山者の踏み込み等により荒廃してしまった湿原を復元します。

- ・日時／平成19年9月11日(火)9時～15時
12日(水)9時～15時

- ・集合／御池燧ヶ岳登山口前

○至仏山東面登山道植生保護柵撤去

シーズンが終了するため、春に登山道脇に設置した保護柵を撤去します。

- ・日時／平成19年10月9日(火)9時～15時
- ・集合／尾瀬山の鼻ビジターセンター前

○第9回インタープリテーション研修

現場で使える話術

今回は今までのようにお話しボランティアを養成するだけでなく、既にお話ボランティアとして活躍している方も対象に、現場で実際に使える自然解説技術(話術)について研修します。詳細は、受講生

募集案内を参照してください。

- ・日時／9月1日(土)～3日(月)

・場所／尾瀬山の鼻ビジターセンターレク

チャールム

なお、宿泊費・資料代等2万1千円がかかります。申込者には後日、研修資料を送付します。

※何れの活動も雨天決行ですが、事故等の危険が懸念される場合は中止し、参加者には2日前までに電話連絡します。



▲尾瀬ボランティアによる植生復元のための播種作業

「友の会」コーナー

尾瀬保護財団「友の会」会員募集!



▲子供たちと自然観察会

「友の会」は、豊かな尾瀬の自然を守る財団の活動を支援して下さる方々の集まりです。

尾瀬保護財団ホームページの「友の会」のページが、リニューアルされました。ぜひ、ご覧ください。

入会申込書の請求がウェブ上で可能となり、県別会員数や、会員の皆様のおたよりを載せたコーナーも新設しました。

年会費(入会時から年度末まで)

- 個人会費 1口 2,000円
- 賛助会員(法人・団体) 1口 10,000円



○入会記念
「2008年卓上フォトカレンダー」の配布も始まっています。

寄付のお願い



▲ビジターセンターでの窓口対応

尾瀬保護財団では広く寄付をお願いしております。

皆様からの貴重な寄付は、入山口におけるマナー啓発、自然解説、植生復元及び調査研究事業など、尾瀬を守るための尾瀬保護財団の活動に活かされます。

■寄付につきましては、財団事務局(群馬県庁17階・027-220-4431)に御来訪いただくか、右の口座にお振込みをお願いいたします。

■尾瀬保護財団は「特定公益増進法人」に指定されており、当財団への寄付は税の優遇措置を受けることができます。

福島県	東邦銀行県庁支店	普通	1078095
	福島銀行本店営業部	普通	0590088
	大東銀行福島支店	普通	1287138
群馬県	群馬銀行県庁支店	普通	0515428
	東和銀行本店営業部	普通	0975531
新潟県	第四銀行県庁支店	普通	1182791
	北越銀行県庁支店	普通	0199366
	大光銀行新潟支店	普通	0837334

イベント情報

尾瀬山の鼻センター

○スライドショー

- ・時間／19時00分～19時40分
- ・場所／ビジターセンターレクチャールーム
- ・実施日／8月2、3、4、5、9、10、11、12、17、18、24、25日
- 9月15、16、22、23、28、29日
- 10月6、7、12、13日

○朝の自然観察会

- ・時間／7時15分～8時00分
- ・場所／山の鼻研究見本園
- ・実施日／8月4、5、11、12、18、19、25、26日
- 9月15、16、17、22、23、24、29、30日
- 10月6、7、8、13、14日

○昼の自然観察会

- ・時間／10時15分～11時00分
- ・場所／山の鼻研究見本園
- ・実施日／8月1、2、7、8、9、14、15、16日
- 9月18、19、20、25、26、27日
- 10月2、3、4、9、10、11日

尾瀬沿いセンター

○スライドショー

- ・時間／19時00分～19時40分
- ・場所／ビジターセンターレクチャールーム
- ・実施日／8月3、4、5、10、11、12、17、18、19、24、25、26日
- 9月1、2、7、8、9、14、15、16、21、22、23、28、29、30日
- 10月5、6、7、12、13、14、15、16日

○朝夕の自然観察会

- ・時間／7時00分～7時40分
- 16時00分～16時40分
- ・場所／大江湿原
- ・実施日／8月3、4、5、10、11、12、17、18、19、24、25、26日
- 9月1、2、7、8、9、14、15、16、21、22、23、28、29、30日
- 10月5、6、7、12、13、14、15、16日



「わたし」の尾瀬写真展

○福島展

- ・日時／8月9～13日 10時00分～20時00分
- ・場所／中合福島店 1番館7階催事場(024-521-515)
- ※8月11日午後2時、12日午前11時尾瀬スライドショー開催

尾瀬国立公園記念事業

○尾瀬国立公園記念イベント

- ・日時／8月31日 12時00分～12時30分
- ・場所／山ノ鼻地区

※時間が多少変更になる場合があります。

(主催) 尾瀬国立公園記念事業実行委員会

編集後記

7月16日、熊沢田代地区の植生復元対象地の調査を行っていた時に中越沖地震に遭遇し、左右に大きく揺れて池塘の水が湿原に流れ出る寸前でした。

地震や台風により被災された皆様に対し心からお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

(清)

みんなの尾瀬を

みんなで守り

みんなで楽しむ

「尾瀬ビジョン」基本理念

ふるかた尾瀬

財団法人 尾瀬保護財団機関誌
2007.08 平成19年8月1日発行
発行所：財団法人 尾瀬保護財団

〒371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL.027-220-4431 / FAX.027-220-4421
E-mail info@oze-fnd.or.jp ホームページアドレス <http://www.oze-fnd.or.jp>